

15のソネット



藤原絵理子

彩色された 醜い些細な日常を
覆い隠すつもりで 目を閉じて見ている
心に残った出来事だけを 何度も何度も
繰り返し話す 自分の世界に浸って

大根の葉が 黄色くなった
裸になった樹の小枝が どこことなく
ふっくらと丸くなって 小鳥の羽ばたきに揺れる
薪ストーブと 冬の陽射しが暖める

穏やかな午後に 心地よく過ごした
森の中のカフェでの 笑顔も 語らいも
何事もなかったかのように 忘れ去る

記憶に残る春が 訪れようとする
目を閉じていても 満開の桜は鮮やかに
控えめに 大根の花が そよ風に揺れている

骨だけになった 樹の群れは
古い写真の中で 諦めている時計に似て
遅れていく時刻 ついさっきまで耀いていた
枝の露は 跡形もなく消えた

誰かからの便りを 待っている
いつか訪れる その日を 待つように
生きることを繋ぐための 取るに足らない
予定を書き込む 茶色い手帳は擦り切れる

もう苦しむことはない
もう美しい風景に 涙を流すこともない
もう 一切合切が 忘れ去られるのだから

さりげない 眉間の皺が 語る
控えめに 白い髪が 訴える
風雪という言葉が 天井に染み込んでいる

過去への扉を閉めて 歩み去った
思い出を 燃やしている その日までの
カレンダーに 印を付けるように
胸をつつく 夢の欠片を夜の河原に捨てる

葉を落とした 桜の小枝が 空に描く
その不規則な網目を通して 降りそそぐ
雪雲の切れ間に霞んだ 冷たく乾いた太陽
もう 何も残されてはいないのだから

ただ明るだけの 下品な連中と
仲良く談笑なんて真っ平だと 心の奥底で
思っている 夢の中で泣いて 目が覚める

恨み言は 早逝した夫の位牌に向かう
生きていたら もっと苦勞だったかもしれないのに
美しい思い出だけが 煙になって薄らぐ

黄昏の土手道の 足に触れる草の香り
手を引かれて ゆっくりと帰り道
新月の宵 目をこらして 気がつくど
お地蔵さまの前掛けに 灯り始める

祖母の乾いた 日なたの匂いが
「淋しかあない 淋しいことなんぞ」
語りかけてきた せせらぎの合間に
藍色に霞んだ竹林が 闇に沈む前に

過去の方角から
笹を手にした子供らが駆けてくる
あたしを追い越して 未来の方へ歓声が遠ざかる

笹の葉を透かして洩れる
去って逝った人の面影が 揺れる
遠い遠い思い出に 微笑だけが浮かぶ



大正生まれだった祖父が
復員してきた時 涙を流した
巻き鍵をお守りに持って 出征した
古い柱時計 曾祖母も大叔母も涙を流した

父は物持ちが良く
ガラスが黄ばんだ腕時計を
引き出しの奥にしまっている
祖父の形見の 二日しか動かない腕時計

あたしの周りには 電気しかない
時計も玩具も なにもかもすべて
電子と正孔と電磁誘導に 埋め尽くされている

こんな今を見て 祖父は笑うだろう
頭を撫でてくれた あの器用な手指で
発条仕掛けの 竜頭を回しながら

静謐だった森が ざわめき始める
築いている壁の 空だけで繋がった向こうで
錬金術師が 花火を打ち上げる
賑わいが 壁を越えて 壁を通り抜けてくる

あたしの心を鎮めてください
立ち騒ぐ波が 砂の城を壊さぬよう
平穏な祝福を与えてください
夢の欠片を 捨てきれぬ者に

追いかけて 敗れた者
追うことを 諦めた者
握り締めた掌に 傷跡を持つ すべての者に

幻を見ている 老いた日に
やがてはすべて 喜ばしい懐かしさと
穏やかな陽ざしに 包まれて 旅立つことを

月のない夜 銀河からの光に
山の端の木枝は 浮かび上がる 黒々と
花は眠っている 午後の明るい顔のままで
川音は 青くさざめいて 流れる

あてにはならない 行く末へ
いくつもの悔恨が 囁きかける それでも
暗闇の彼方に瞬く 幽かな橙色の光は
まだ燃え尽きていない 命が揺らめく

漆黒の闇は 美しい髪に溶けて
木霊は 愛しい人の唇から漏れた 言葉の
心地よいところだけ 繰り返している

魂は 夜鳴く鳥に宿り ひととき華やかに
枯れた欲望は 古びた墓石に 苔を育てる
障子の向こうから 幼子の遊ぶ声



畦道は緋毛氈 緩やかに
尖っていた葉を 柔かな色に変えて
稲穂は黄金色に 垂れた頭が揺れる
埋もれてしまえば 高い空はあの世へ

お寺へ続く 暗い石段の両側で
「死人花」と嚇された 幼い子供は
影も形も消えうせた 夜が暗闇だった彼方に
美しかった 畏れを抱く心と一緒に

真っ赤な冠を揺らせて
黒い蝶が口吻を伸ばす 薄暗がり
いくつもの魂が待っている その接吻を

手を合わせて 目を閉じると
法師蝉の遠慮がちな声 最後の鳴き声
あたしは祖父母に どこかで寛恕を求めている



家の玄関を出たら 右へ
春なら 左向かいの医院は花盛り
秋なら 正面遠くにお寺の紅葉
雨さえ降らなければ 毎日の日課

石段を昇って 神社にお参りして
参道のパン屋で パンを買う
息子は 苦笑しながら 500円玉をくれる
嫁は 諦め顔で パン粥を作ってくれる

道行く 小学生の笑い声
孫の顔を思い出そうと 立ち止まる
大人になってからの顔は どうしても思い出せない

今日もいい天気
うるさい女医のいる 病院に背を向けて
ゆっくりと 幸せな散歩に出かける



白い萩の花は 秋雨にうなだれて
庭の隅には 夏蝉の死骸が朽ちて
宛名のない手紙は 燃やされる
薄い紫の煙が 竜胆の花と混ざる

黄金色の思い出に 溺れて沈んだ
綺麗なもののしか 見えなくなった
醜い真実は 忘却の河に流してしまった
降りしきっているのは 冷たい秋雨 細かく

「野の花を摘んで来たの」

年老いた少女の 無邪気な瞳は 透明に
透きとおって 磨り硝子のように歌っている

一日の疲れは 葡萄酒の魂で癒される
夜の暗闇は 追い払う 庭のことなど 彼女の頭から
そうして 明日の天気だけを 気にしている

A misty landscape with a river and mountains at dawn or dusk. The sky is a soft, hazy purple and blue, and the water reflects the light. The mountains in the background are shrouded in mist, and the foreground shows dark, silhouetted trees and bushes.

年老いていく 秋は黄昏の川に
燃え残った夢の残骸は 流れて
それでも 生きなければ ささやかな
喜びのために あてにはならない

忘れられた郵便ポストに 投函した
出しそびれた手紙 青い月の夜に
あたしの喜びは ほかの誰かの
悲しみかもしれない にがにがしく

高い空 風景は よそよそしくなって
丘の上の樹は 影を伸ばす くっきりと
見知らぬ街に 教会の夕鐘が響いて漂う

あたしの心は 影をなくして 彷徨った
あてもなく ゆらゆらと揺れながら
乾いた空気の温度に 冬を探している



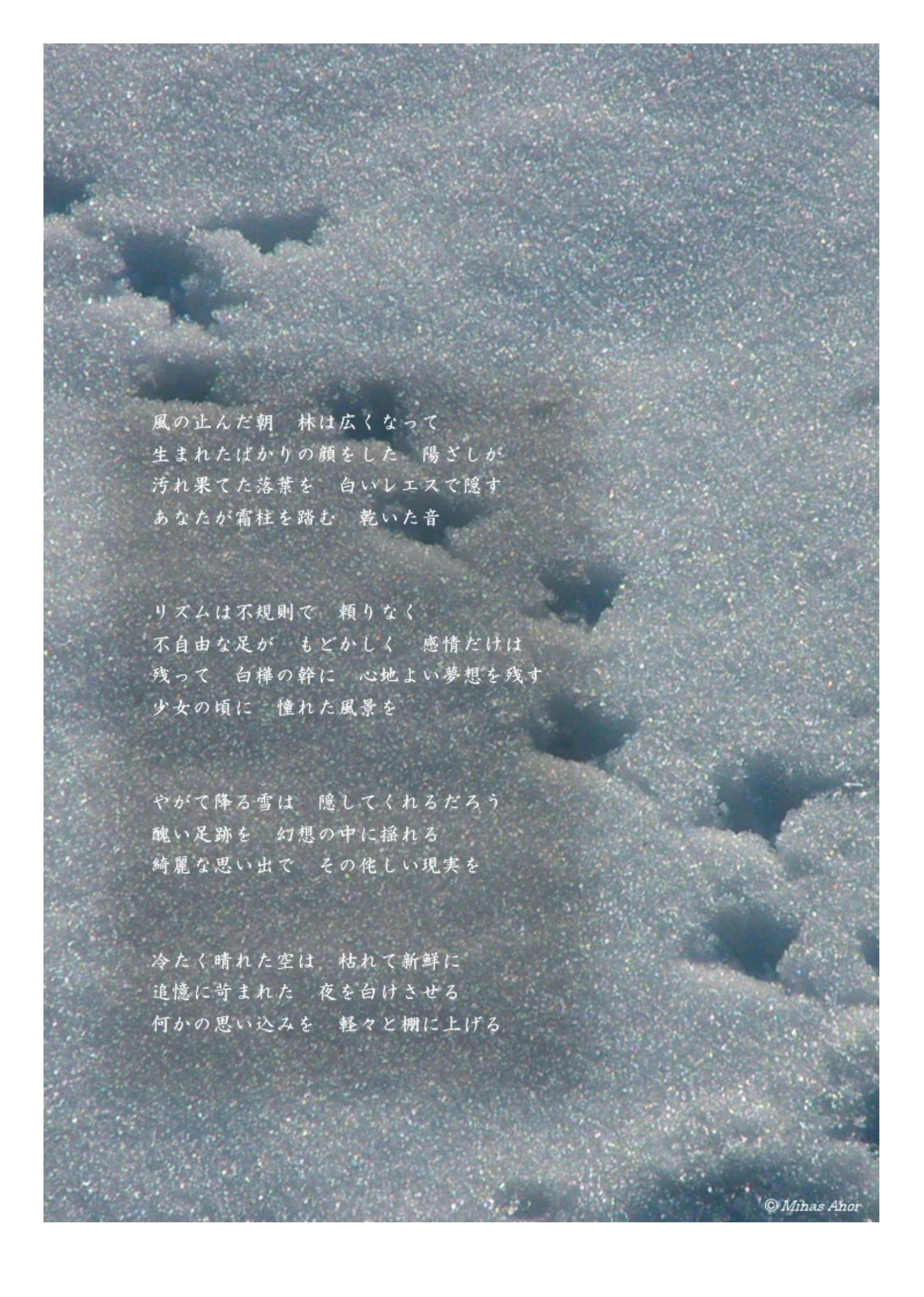
柔らかい悲しみは 降り積もる
落ち葉に埋もれて 腐敗の暖かさに
林の樹木は無頓着に 日々を紡ぐ
自然な 季節の移ろいに 滑らかに

回転運動の 単調な繰り返しに
追随して耀く 儂く健気な すべてのもの
秋の夜更けに 虫の音に紛れて
落ちていく 螺旋を描いて 安らぎを求めて

寺の萩は散った 肌寒い風に揺られて
竹葉の先に宿った朝露は 乾いて消えた
放蕩息子の徳利に 酒は一滴も残っていない

雄鹿の鳴く声が 密かに杉木立を抜ける
捨ててきたものへの 挽歌に耳をそばだてる
ふと過ぎる 風の芯が 過ぎ去る時を知らせる

老いた冬に



風の止んだ朝 林は広がって
生まれたばかりの顔をした 陽ざしが
汚れ果てた落葉を 白いレエスで隠す
あなたが霜柱を踏む 乾いた音

リズムは不規則で 頼りなく
不自由な足が もどかしく 感情だけは
残って 白樺の幹に 心地よい夢を残す
少女の頃に 憧れた風景を

やがて降る雪は 隠してくれるだろう
醜い足跡を 幻想の中に揺れる
綺麗な思い出で その侘しい現実を

冷たく晴れた空は 枯れて新鮮に
追憶に苛まれた 夜を白けさせる
何かの思い込みを 軽々と棚に上げる



風が止んだ 窓に凭れている月光
まるくなった猫の瞳に 映る洋燈の揺らめき
一枚の油絵から 零れ落ちる泉のしずくが
なめらかに滑り落ちた 鍵盤の上

都会のざわめきは遠く 静けさに
かき消された いくつもの気がかりと一緒に
迷い込んで さまよった 不安の
暗い森で ようやく見つけた 明かりのように

苦しみと情熱の記憶は 朧になって
遠ざかる 車窓から眺める景色になる
いつかきっと 懐かしく楽しい 思い出話になる

暖炉の薪が ぱちっ と爆ぜた 世界は
あたしの周りで まんまるい猫の目になる
小さなラグの上に完結する ほっこりと暖かく

花の色は



命日には 花が咲き始める
あの時のまま 時間は止まっている
部屋は汚れ果てた 誰も来なくなったから
すべてが汚らしく見えて 手ばかり洗っている

不安の海は時化て 人魚は深い水底へ
押し寄せる波は 迫り上がり 崩れて
どろりとした暗黒へ 引きずり込もうとする
薬を探そうとして 塵の海を泳ぐ

見られたくないのよ 老いさらばえて
当たり前の事もできなくなった みっともない姿を
残された たったひとつの矜持 ただの見栄っぱり

明日は散歩に出て 忘れてしまおう
杖を持たずに 痛む脚を我慢して
満開の花に霞んで 昔見た風景に埋もれて

あとがき

読んでくださったみなさん、ありがとうございます。

この詩集は、亡くなった祖父母へのオマージュをこめて、
今生きていることと、いずれ誰もが迎える死を、どうつなげるか
ということを思って作った作品を集めたものです。

使った写真の撮影地は、郡上八幡、軽井沢、奈良、加茂、吉野
小樽、万座、京都です。

2015年 夏

藤原絵理子

15のソネット

<http://p.booklog.jp/book/99724>

著者：藤原絵理子

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/arwen-eriko/profile>

all photos by Arwen_Eriko

©2015 *Minas Anor* All rights reserved

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/99724>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/99724>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ